

「油日湿原」の保護と保全活動に関する研究

片山 慈敏 (社会人コース)

1. はじめに

「油日湿原」は、湧水が浸出しているため、山間の緩斜面に位置しながら、植林は行えず、生産性の低い、使い道のない困りものであった。周縁に林道は開設されていたが、人手も殆ど入らなかったことから、昔ながらの高度な自然がそのまま残されており、生物多様性が重要視される今日になって、希少な野生動植物の豊富な湿原として見直されるようになってきた。

本研究では、「油日湿原」との遭遇を契機に地権者との交渉を経て、保護・保全活動の立ち上げから「油日サギスグ等生息・生育地保護区」に指定されるまでの経緯を整理し、湿原と周縁の管理作業の効果、湿原の現状とそこに生息する動植物についての調査研究を実施したので、その結果を報告する。具体的には以下の3点について明らかにすることを目的とした。

- 1) 多様な希少野生動植物の生息・生育地である「油日湿原」の環境を将来にわたって保護・保全するために、湿原の現状調査を行い、基礎的な資料を得る。
- 2) 地元の人を含めた保護・保全活動グループを立ち上げ、共同作業による具体的な管理手法を見出す。動植物の調査については誰もができる簡便な方法確立する。
- 3) 生態系や湿原の重要性について学ぶ身近な環境学習のフィールドとして活用できる仕組みについて考察し提案する。

2. 研究の方法

保護・保全活動を始めるに当たり、入山を管理し、踏圧と盗掘を回避することが不可欠と判断した。そのため、林道と湿原の整備として、林道のゲート、湿原前の掲示板と周縁にロープ柵を設置し、湿原には一ヶ所限定の出入口、観察路と木道を開設し、その効果を観察した。

湿原の縮小化と乾燥化を抑制するために、必要最低限の作業として、下草刈りと高木の除伐、水溜りの水位の調整を試行し、植生への影響を観察し、記録した。

湿原の水環境を調査し、水の流下方向や流量の管理方法を検討した。植生の観察は木道と観察路上からのルートセンサス調査により行い、植物と土壤水分との関わり、湿原特有の13種の保護対象植物については、それぞれの花期や生育場所について調査した。

3. 結果と考察

湿原までの林道の整備作業により、入山者の管理ができ、踏圧と盗掘を防止することができた。下草刈りと高木の除伐、水溜りの水位の調整の結果、これまで目立たなかった希少な植物が増加し、半乾燥地周縁の湿潤範囲も広がり、乾燥化を抑制できる感触が得られた。今後の作業の方向性と将来予測の一つの判断材料となった。

湿原の水環境を調査した結果、湿原発達の条件である集水域が狭く、湧水であることに加え、水質は貧栄養で、流路も機能的であり、湿原の存続には良好な水環境であることがわかった。

13種の保護対象植物種を中心に調査した結果、花期や生育場所を特定し、湿原の現況と植生の一端を明らかにすることができた。また、調査の際に有識者が同行すれば、関心も興味も高くなり、作業や環境学習も飛躍的に進むことを実感した。今回得られた基礎データは、今後の作業と調査に活用できるものとする。

4. 今後の保護・保全体制と活動

「油日湿原」の保護・保全活動は、自然の復元力を活かし、なるべく手を加えない方法で実施していくことを原則とする。地権者や一般の人々を巻き込み楽しみながら、保護・保全活動ができる仕組みをつくり、みんなの「油日湿原」、「環境学習のフィールド」として公開していく方向が望ましい。その上で、豊かな生態系を維持し、人と自然とが持続的なかわりを持つ管理体制を整備・構築していくことが必要であるとする。